



会 報

The Japan Society for Culture in English

日本英語文化学会

日本学術会議協力学術研究団体

# NEWSLETTER

NO.15

10. Nov. 2021







イタリア・アカデミー賞 (ダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞) 主要全5部門受賞/ 米アカデミー賞(R)イタリア代表作品選出/ 第1回ローマ国際映画祭特別招待/ 第29回モスクワ国際映画祭 監督賞・観客賞受賞/

原題 *LA SCONOSCIUTA* / *THE UNKNOWN WOMAN* / 製作年 2006 年 / 製作国イタリア / 上映時間 121 分 / 映倫区分 R-15 / 配給会社ハピネット

スタッフ：監督&脚本 ジュゼッペ・トルナトーレ / 製作総指揮：ラウラ・ファットーリ / 撮影：ファビオ・ザマリオン / 美術：トニーノ・ゼッラ / 衣装：ニコレッタ・エルコーレ / 音楽：エンニオ・モリコーネ /

キャスト：クセニア・ラパポルトー イレーナ / クララ・ドッセーナ-テア / ミケーレ・ブラチド-ムッファ 黒カビ / クラウディア・ジェリーニ-ヴァレリア・アダケル / ピエラ・デッリ・エスポスティ-ジーナ / アレッサンドロ・アベル-マッテオ / クララ・ドッセーナ-テア・アダケル / アンヘラ・モリーナ-ルクレツァ / マルゲリータ・ブイ-弁護士 / ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ-ドナート・アダケル /

## ☆母性とは？

『題名のない子守唄』は、タイトルが暗示するように「母性」がテーマである。

「母性」がどのようなものかについては、時代と共に定義の内容が若干違ってきている。従来型の母性の定義は、母性とは、「女性のもつ母親としての性質。母親として、自分の子供を守り育てようとする本能的特質」（デジタル大辞典）、「女性が、子どもを守り育てようとする母親として持つ本能的な性質や機能」（精選版 日本国語大辞典）とされる。これらの定義は、女性は母になれば母性を自然に獲得するもの、あるいは母性は

女性の中にあらかじめ埋め込まれていて、出産と同時に開花するもの、という暗黙の前提に基づいている。しかし、C.G.ユング派の「グレートマザー」のように母性の2面性、つまり「良い母」として生み育てる肯定的な面と、「恐ろしい母」の子どもを縛りつけて自立を妨げ、呑みこんで死に至らしめる悪い面が指摘するように、最近では母性イコール「慈しみの母」でない場合もある。より現代的な「母性」の定義は、「生物学的に見て、体の中に、受精、妊娠、生産、授乳することのできる生殖機能を備えている性、母性は、本能的に女性に備わっているものではなく、一つの文化的・社会的特性である。したがって母性は、その女性の人間形成過程、とりわけ3~4歳ころの母親とのかかわりによって個人差がある」（ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典）となる。

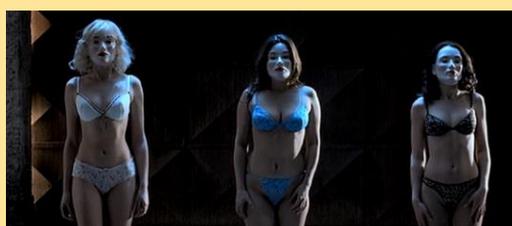
「聖母マリア」信仰の処女懐胎にみられるように、女性は母になった後は、以前は娼婦であったとしても、子供にとっては無二の清らかな犯すべき存在に変容し、母になった女性は世俗的欲望のすべてを捨てて愛しいわが子のために我が身を捨てて奉仕し愛する、というのは神話でしかないことは広く知られている。さらに処女懐胎は、自然界ではありえない生命現象である。母になるには性行為が必然である。母は処女受胎する清らかな乙女とほど遠い存在であったとしてもやはり母なのだ！というのが映画『題名のない子守唄』である。

## ☆搾取される女の性

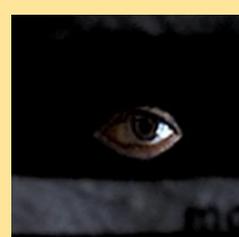
冒頭のクレジット・タイトルの前に展開される映像は、ブラジャーとパンティだけをつけて仮面をかぶった女たちの整列を見せる。横並びの女たちは、掛け声に応じて後ろ姿から前向きに変わり、次々とグループが入れ替わる。裸でなければ一見ファッションショーの会場に見えるが、壁穴から覗く男の不気味な目が女体の品定めを経た後の売買市場であることを知らせる。「彼女がいい」と壁の目に気に入られた女は、下着を脱いで全裸になり、一回転させられる。

妖しい光景は一転して、ウクライナからイタリアの北部トリエステに長距離バスに乗ってやってくる女、イレーネの疲れた顔を映し出す。女体の売買会場でヤクザの黒カビに選ばれたイレーネは、性の奴隷として身体を男たちにむさぼられ搾取された後、金を奪ってトリエステに逃亡する。32歳のこの女の美貌は、不安と疲労で曇る。場面が進むにつれてイレーネの過去が連想ゲームの形でこま切れにミステリアスに現在と過去が反復して示される。生きるすべを持たない若い美女が命をつなぐ道はただ一つ、性の奴隷になることである。イレーネたち売春婦は、稼ぎが少ないと全裸で縄

に縛られ逆さ吊りにされたあげく、飼い主の男に尿をひっかけられた。イレーネは、黒カビに飼われて次々と客を取らされたあげく、不注意にも妊娠するが、嬰兒売買が予想外の利益を生むことに気づいた黒カビによって12年間に9回の出産を強制される。イレーネは、人気犬種の牝犬同様に、交配させられて出産にもっていかれる。肉体は母になっても、イレーネは性の快樂も母の慈愛も経験することはなかった、というか許されなかった。しかし9番目の最後の出産の時は違っていた。



仮面をつけて肉体をさらす娼婦たち



選抜された女は全裸になって一回転

壁穴から覗く男の目

2006 MEDUSA FILM – MANIGOLDA

### ☆母性剥奪

8人の子供の父親は客に過ぎない男たちだったが、9番目の女の子は、恋人ネッロの忘れ形見だった。産婆に赤子の顔を見せてほしいと懇願するイレーネは、この子だけは手放したくなかった。嫉妬する黒カビにごみ捨て場の遺体にされたネッロの面影を求めて、イレーネはアダケル家のメイドになることを画策する。愛の幸せを教えてくれたネッロとの愛の結晶を奪われたイレーネの母性は、9度目の出産によって始動する。貴金属デザイナーのアダケル夫妻の養女として大切に育てられているテアの乳母になったイレーネは、母性の至福を経験する。しかし、イレーネが亡き者にしたはずの黒カビは生きていて、復讐のために後を追って、再びイレーネに寄生しようとする。黒カビの嫌がらせと悪事によって、隠蔽した過去と正体をアダケル夫人に気づかれたイレーネはテ

アから遠ざけられて、2度目の母性剥奪の危機を迎える。負けない女イレーネは、叡知を振り絞って戦うが、黒カビの悪事によって再び窮地に陥る。

## ☆負の連鎖

イレーネの若さと美貌、才気煥発、やる気満々で機転が利き、勇気のある特質は現代の成功するキャリア・ウーマンの特徴である。それなのに、貧乏で最低限の教育も技能研修も受けられない劣悪な故郷の環境は、キャリア・ウーマンを育てることはできない。優れた才能をつぶして、才女を悪女にしてしまう。売春しか生きる手立てをもたないイレーネのような女には、悪いひも(女性を働かせて金をみつがせる情夫)がつきまとう。まじめに生きようとしても、どこまでもひもが追いかけてきてしがみつき、女はひもの犯した悪事に巻き込まれて共に地獄に落ちる。こういった負の連鎖(悪が悪を生むこと)は、世の中が根本的には「弱肉強食」の原理で動いているからに他ならない。イレーネの住む世界では、利を生むのは女の身体であっても、男に比べて社会的パワーの劣る女は、男に飼われて買われ、搾取されるしかない。一たび悪環境に落ちると、負の連鎖は容易には絶てない。この映画は、貧しい祖国を捨てて、より豊かな他国に密入国した難民の過酷な実態への社会的告発である。売春や代理母等の人身売買に携さわることを余儀なくされたロシアや東欧出身の女性の人間性を剥奪する社会悪への抗議である。母性という普遍的テーマの背後に潜む外国人女性の苦悩のすぐれた描写であり、オブレードに包まれた鋭い抗議である。

イレーネの順調に見えたメイド業も黒カビの出現によってめっちゃめっちゃにされる。イレーネは、サンタクロースに化けた黒カビの手下によって路上で暴行をうけ、部屋も台無しにされ、アダケル夫人まで殺される。イレーネは、殺人の嫌疑をかけられ、おぞましい過去と犯罪が暴かれて、刑務所に入れられる。

しかし、イレーネが一方的な被害者なのかというと全然そうではない。「目には目を、歯には歯を」の原則を身をもって知ったイレーネは、黒カビを殺そうとするし、盗聴や家屋侵入、盗み等の犯罪を巧妙に犯す。テアの傍にいたいイレーネは、アダケル家のメイド職を得るために手段を選ばない。アダケル家の情報を得るためにメイドのジアに近づき、職を奪って代わりに自分が入りこむために事故に見せかけてジアをアパートのらせん階段から突き落として半殺しにする。これを母性の強さと呼ぶのであろうか？イレーネは、防衛力にハンディのある幼いテアを心配して特訓するが、自分が性奴隷であった時にされたように全身を縄で縛って立ち上がる訓練を密かに授ける、そしていじ

める者には倍返しの暴力で対抗することを刷り込む。これはイレーネのような弱肉強食の劣悪な環境に置かれた者の生き残り術に他ならない。ネッロはアダケルの恋人というだけの理由で惨殺されてごみ捨て場に埋められ、アダケル家のメイドのジアもアダケル夫人もイレーネと関わったことによって破滅しているし、最後には黒カビもイレーネと争って死体になって埋もれる。結果としてイレーネは悪女でもある。イレーネは同情すべき被害者であるとばかりは言えないのである。イレーネは、「良い母」の側面を持つグレートマザーであるが、恐ろしい女である。悪は悪を呼ぶ負の連鎖の体現者だとすら言える。アダケル家のメイドのジアもアダケル夫人も、イレーネと関わったことによって破滅しているので、イレーネは元々は同情すべき被害者だが、結果として悪女に育ってしまった。

### ☆皮肉な結末

ありとあらゆる手段を講じてテアの愛を勝ち得たイレーネだが、その代償は大きく、刑務所生活を余儀なくされる。もっとも皮肉なのは、あれほどまでに追い求めた我が子テアがイレーネの実子ではなかったことである。アダケルという名は、黒カビが自分のペンダントの製造者名を見て、考えついたものである。弁護士らにその事実を指摘されたイレーネは、ショックで気絶する。なんとも気の毒で滑稽な結末だが、実の親子でないにもかかわらずイレーネのテアへの愛は薄れない。そして年月を経てもテアは、イレーネを忘れていなかった。監督のトルナトーレは、母性は生物学上の子供に対してだけ注がれるわけではない、愛しいと思った子供への母性愛は血のつながりに関係なく本物だと言っている。そして本気で愛された子供は、DNA 鑑定で母でないにもかかわらず本気で愛し返す。イレーネは悪女だったかもしれないが、良い母としてのグレートマザーになったのである。イレーネの血へのこだわりを監督はあっさりとかわしている、ここにあたたかい皮肉が息づいている。母性は、聖母マリアが象徴するような清らかなばかりではないけれど、それでも強くあたたかく包みこんでくれるものなのだというのをこの映画は教えてくれる。

### ☆母性にくるんだ難民窮状アピール

日本版の題名である『題名のない子守唄』は、イレーネがテアを寝かしつける時にせがまれて唄った故郷の子守唄である。ウクライナ語であろう子守唄は、イタリア人のテアに意味はわからなかったが、普遍的母性を象徴している。この監督の秀逸な点は、不

法移民の置かれた劣悪な環境と人権剥奪の社会悪を母性という普遍的テーマでくるんでやんわりと告発しているところである。母性からめて難民の苦悩を描けば、何人(なにびと)も他人ごとと無視できず、共感し興味をもたざるをえない。不法移民の過酷な実態のみを訴えることに終わらない変化球がこの映画に幅を持たせている。『題名のない子守唄』は、普遍的母性の問題に的に絞っているように見えて、実は難民の置かれた社会問題を訴える複眼の映画なのである。 原題が *The Unknown Woman* (知られざる女) であることからわかるように、世間から関心を持たれることなく放置されている移民女性の悲劇を訴えるための最も効果的な方法は、母性という永遠のテーマに絡めて演出することである。外国人の悲劇という他人ごとを母性にくるみ、観客をひきつけるミステリーに仕立て直して普遍化してアピールした点に、トルナトーレ監督の周到に計算された裏技が見られる。

©2021 J. Shimizu. All Rights Reserved. 4 August 2021





ウクライナのイレーネは、イタリアのアダケル家のメイド兼乳母になって子供と再会

(C)2006 MEDUSA FILM - MANIGOLDA

## 研究ノート

### 書誌から見た日本の“hospitality”受容（抄）

佐々木 隆（武蔵野学院大学）

#### プロローグ

日本では古来より「(お)もてなし」という言葉があるが(日本大辞典刊行会 315-316)、幕末に英語“hospitality”が入って来ると、おもに「歓待」の訳語が当てられ推移してきた。しかし、特に戦後になると「ホスピタリティ(ー)」が使用されることが徐々に増え、カタカナ表記の「ホスピタリティ」を見る機会が増大している。「ホスピタリティ」という言葉自体がどのように定着してきたのかを社会的な情勢を踏まえながらも書誌を中心にして辿っていきたい。

#### 1 ホスピタリティの研究と教育

「ホスピタリティ」のという用語は観光産業分野でキーワードになっていたものの、

研究や教育という側面ではどのように定着したのだろうか。ここでは第1に研究論文、第2に博士論文、第3に研究書、第4に大学等の設置状況、第5に学会等の動向の4点を見ておきたい。

### 1-1 研究論文

第1の大学の紀要等に収録された研究論文では佐々木宏茂「ホスピタリティー産業の生産要素の標準化について」(『東洋大学短期大学紀要』第1巻、東洋短期大学紀要、1970年3月)、井上博文「ホスピタリティー・サービス産業における資本予算」(『東洋大学短期大学紀要』第6巻、東洋大学短期大学、1975年3月)、ヘンリ・ヌーウエン、初見まり子「歓待のすすめ—ホスピタリティーとキリスト者」(『神学ダイジェスト』第40号、上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会、1976年6月)が初期のものと言えよう。観光産業と宗教的な習慣にかかわるものとなっている。最近では専門学会の学会誌などもあり、ホスピタリティマネジメントを中心に多くの論文が発表されている。

### 1-2 博士論文

学術論文の上位として博士論文を位置付けるとすれば、“hospitality”「ホスピタリティー」を論題として含めた博士論文として注目することはあながち無視することはできないだろう。国立国会図書館で「ホスピタリティー」をキーワードに博士論文を検索すると2021年8月15日段階で15文献がヒットする。

高橋美貴『近世・近代移行期における漁村・漁政史の研究』

授与大学名：東北大学／授与年月日：1995年3月24日／博士(文学)

藤沢真理子『巡礼接待思想ホスピタリティーを活かしたホスピスボランティア』

授与大学名：大阪府立大学／授与年月日：2003年3月31日／博士(社会福祉学)

五十嵐元一『マーケティングにおけるホスピタリティーの機能と役割に関する研究』

授与大学名：北海学園大学／授与年月日：2006年3月31日／博士(経営学)

黄女玲『ホスピタリティー産業に対応する日本語教育の試み：待遇表現の理解と使用を中心に』

授与大学名：大阪大学／授与年月日：2008年3月25日／博士(言語文化学)

宮崎朋子『会員制スポーツ施設におけるホスピタリティー・サービスの概念モデル構築』

授与大学名：順天堂大学／授与年月日：2009年3月28日／博士(スポーツ健康科学)

祁李寧『観光教育についての一試論：ホスピタリティー教育の視点から』

授与大学名：流通経済大学／授与年月日：2011年3月20日／博士(社会学)

宮城博文『ホスピタリティー産業の形成におけるデスティネーションの発展：沖縄県におけるホテル業の集積の経緯、及びサービス・コンセプト提供の実現を中心に』

- 授与大学名：立命館大学／授与年月日：2011年3月31日／博士（経営学）  
吉岡勉『ホスピタリティ戦略会計：ホテル産業における戦略会計に関する研究』
- 授与大学名：亜細亜大学／授与年月日：2012年9月30日／博士（経営学）  
Anel Bagadayeva『公共サービスにおけるホスピタリティ：JR改革を事例に』
- 授与大学名：広島大学／授与年月日：2014年3月23日／博士（学術）  
牧和生『サブカルチャーにおけるダイナミズムとホスピタリティ』
- 授与大学名：青山学院大学／出版年月日等：2014年3月25日／博士（経済学）  
今井真貴子『風土に育まれた日本旅館のおもいやりに関する研究：「ホスピタリティ」という言葉がもつ表層性への疑義』
- 授与大学名：同志社大学／授与年月日：2016年3月31日／博士（政策科学）  
永田美江子『女子大学における観光ホスピタリティ教育の展開：平安女学院大学を事例に』
- 授与大学名：立命館大学／授与年月日：2017年9月25日／博士（学術）  
武田知也『お辞儀の動作及び印象評価に関する研究』
- 授与大学名：京都工芸繊維大学／授与年月日：2017年9月25日／博士（学術）  
星野晴彦『障害者福祉サービスをホスピタリティの視点から考察する～社会福祉サービスのパラダイムチェンジの時代に向けて』
- 授与大学名：国際医療福祉大学／授与年月日：2018年3月7日／博士（医療福祉ジャーナリズム学）  
Hashimoto Shunsaku. *Development of Human Resource Management in the Hospitality Organization : Focusing on the concept of "Treating employees as customers"*
- 授与大学名：和歌山大学／授与年月日：2021年3月25日／博士（観光学）  
※橋本俊作『ホスピタリティ組織における人的資源管理の展開：「従業員を顧客として扱う」という概念に焦点をおいて』

なお、博士、修士、学士を通じてホスピタリティ、ホスピタリティ学の学位はない<sup>(1)</sup>。国立国会図書館の博士論文収集は1935年より文部省に保管されていたものが帝国図書館に移管されことに端を発し、その後2013年には学位規則の改正に伴い、インターネットの利用により公表となっている<sup>(2)</sup>。

### 1-3 研究書

第2の研究書では書名に「ホスピタリティ」がついているものとしては以下の通りである。

石川照雄編著『スイスブック ホスピタリティ・デザイン・ツール』別冊商店建築26  
ちょっと違ったデザイン・シリーズ、商店建築社、1986年2月

田中掃六『伸びる会社は「サービス」を組織化する ホスピタリティマインドを育てる「ヒューマンQC」のすすめ サービス業・ホテル・旅館・飲食業版』 HBJ business express、HBJ 出版局、1989年5月

『観光ホスピタリティモデル事業事例集 親切なおもてなし』ぎょうせい北海道支社、1993年3月

奥住正道『外食産業最前線 ホスピタリティ時代のビジネス』実教出版、1994年11月

服部勝人『新概念としてのホスピタリティ・マネジメント ポスト・サービス社会の指標』第2版、学術選書、1995年4月

服部勝人『ホスピタリティ・マネジメント：ポスト・サービス社会の経営』丸善、1996年11月

福永昭・鈴木豊編著『ホスピタリティ産業論 顧客満足管理の時代を迎えて』中央経済社、1996年5月

フィリップ・コトラー、ジェームス・マーキンス、ジョン・ボーエン／ホスピタリティ・ビジネス研究会訳『ホスピタリティと観光のマーケティング』東海大学出版会、1997年4月』

※Philip Kotler, James Makens, and John Bowen. *Marketing for Hospitality and Tourism*. Prentice Hall, 1996.

力石寛夫『ホスピタリティ サービスの原点』商業界、1997年11月

平野文彦編著『ホスピタリティ・ビジネス』税務経理協会、1999年3月

浅野浩子・菊地史子『ホスピタリティの表現研究 ビジネス・マナー編』創成社、1999年4月

山上徹『ホスピタリティ・観光産業論』白桃書房、1999年4月

浅野房世・三宅祥介『安らぎと緑の公園づくり ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ』鹿島出版会、1999年7月

高田都悠子『スチュワーデスがふれた世界のホスピタリティ』高田都悠子、2000年1月

内田武之『行きやすい買いやすい店舗 ホスピタリティを実現する』商業界、2000年1月

古閑博美・斉藤茂子・中谷千尋『看護とホスピタリティ』ブレーン出版、2000年1月

小山政彦『e ビジネスホスピタリティ 電腦商法の儲かる方程式』ビジネス社、2000年9月

平井誠也編著『思いやりとホスピタリティの心理学』北大路書房、2000年12月

さらに専門的なものとしては以下のようなものがある。

服部勝人『ホスピタリティ学原論』内外出版、2004年5月  
服部勝人『ホスピタリティ・マネジメント入門』丸善出版、2004年6月  
高畑吉宏『ホスピタリティマインド お客様の笑顔を生きがいにするヒューマンスキル』成甲書房、2005年5月  
服部勝人『ホスピタリティ・マネジメント学原論 新概念としてのフレームワーク』丸善出版、2006年1月  
山上徹『ホスピタリティ精神の深化—おもてなし文化の創造に向けて—』法律文化社、2008年2月  
立教大学観光研究所編『ホスピタリティマネジメント』有斐閣アカデミア、2008年2月  
服部勝人『ホスピタリティ学のすすめ』丸善出版、2008年5月  
サービス&ホスピタリティ・マネジメント研究グループ／徳江順一郎編『サービス&ホスピタリティ・マネジメント』産業能率大学出版部、2011年3月  
徳江順一郎『ホスピタリティ・マネジメント』同文館出版、2012年9月  
徳江順一郎『ソーシャル・ホスピタリティ』産業能率大学出版部、2013年4月  
徳江純一郎・長谷川恵一他『数字でとられるホスピタリティ 会計&ファイナンス』産業能率大学出版部、2014年4月  
徳江順一郎編『ブライダル・ホスピタリティ・マネジメント』創成社、2014年11月  
西澤健次『ホスピタリティと会計』国元書房、2016年4月  
徳江順一郎『ホスピタリティ・デザイン論』創成社、2016年7月  
中里のぞみ・紺野猷邦『ホスピタリティとホスピタリティマネジメント これからのホスピタリティ経営』パレード、2017年2月

書名を見ただけでも一目瞭然だが、ホスピタリティマネジメントに関するものが多く出版されている。

#### 1-4 大学等の設置状況

第3の大学等の設置状況について、観光に関しては1963年に東洋大学短期大学部観光科が日本で最初の観光学科であり、1998年には立教大学社会学部観光学科を改組し、日本初の観光学部を設置している。大学名に「観光」があるのは、2006年に大阪観光大学がある。大阪明浄大学の名称変更である。では「ホスピタリティ」についてはどうだろうか。設置順に紹介すると以下の通りである。

- 2005年 明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部ホスピタリティ・ツーリズム学科
- 2005年 熊本学園大学商学部ホスピタリティ・マネジメント学科
- 2006年 松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科
- 2008年 神戸海星女子学院大学現代人間学部観光ホスピタリティ学科
- 2008年 大阪学院大学経営学部ホスピタリティ経営学科
- 2009年 亜細亜大学経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科

なお、学位としてホスピタリティが冠となる学位は現在、明海大学の学士（ホスピタリティ・ツーリズム学）しかない。

### 1-5 学会等の動向

研究状況を見る際は学会等の活動状況も大きな意味を持つ。特に特定の分野に特化した学会は研究対象そのものを学会名の冠にすることが多い。また、学会が組織されれば、当然学会誌の発行も同時に起こり、研究論文が発表されることになる。

次に学会関係の設立状況を見ておきたい。

- 1992年 8月16日 日本ホスピタリティ研究会設立。
- 1995年 1月24日 日本ホスピタリティ研究会から日本ホスピタリティ協会に名称変更。
- 1996年 1月24日 日本ホスピタリティ学会設立。
- 1997年 10月4日 日本ホスピタリティ学会から日本ホスピタリティ・マネジメント学会に名称変更。
- 2001年 3月15日 日本ホスピタリティ協会から日本ホスピタリティ推進協会に名称変更。(2002年 5月2日に内閣府特定非営利法人(NPO)取得)。
- 2002年 3月16日 日本観光ホスピタリティ教育学会設立。
- 2010年 4月 人とホスピタリティ研究所設立。

## 2 “hospitality” 「ホスピタリティ」受容の断片<sup>(3)</sup>

これまでの筆者の調査等により分かったことを時系列に紹介しておきたい。

堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』洋書調所、1862年

hospitality 好ンデ客ヲハ田ルヲ旅人ヲ善ク遇スルヲ (p.374)

※日本で最初の紹介

柴田昌吉・子安峻編『英和字彙』日就社、1873年1月

※ “hospitality” 見出し語あり

斎藤秀三郎『斎藤和英大辞典 普及版』名著普及会、1928年（1979年3月復刻）

※「Kantai〔歓待〕」の英訳語に“hospitality”あり。

鈴木梅四郎『日本医業経営法の革新』研文社、1931年10月

※「『六』ホスピタリチーの支持者」の小見出しあり

佐々木宏茂「ホスピタリティー産業の生産要素の標準化について」、『東洋大学短期大学紀要』第1巻、東洋短期大学紀要、1970年3月

石川照雄編著『スイスブック ホスピタリティー・デザイン・ツール』、別冊商店建築 26 ちょっと違ったデザイン・シリーズ、商店建築社、1986年2月

斎藤栄三郎編『外国から新語辞典』（第6版）集英社、1989年4月

※「ホスピタリティー」の見出し語あり

松村明編『大辞林』（初版）三省堂、1990年4月

※「ホスピタリティー」の見出し語あり

山上徹・堀野正人編著『ホスピタリティー・観光事典』白桃書房、2001年3月

エイブラハム・ピザム／中村清訳『ホスピタリティマネジメント事典』産業調査会事典出版センター、2009年7月

※Abraham Pizam, editor. *International Encyclopedia of Hospitality Management*. Elsevier, 2005.

新村出編『広辞苑』（第6版）岩波書店、2008年1月

※「ホスピタリティー」の見出し語あり

北原保雄編『明鏡国語辞典』（第2版）大修館書店、2010年10月

※「ホスピタリティー」の見出し語あり

### 3 まとめ

“hospitality”はすでに1862年には英和辞典とは言え、見出し語として取り上げられている。1964年の東京オリンピック大会、1970年の大阪の万国博覧会といった戦後日本が経験した国際的な大イベントを契機に学問分野・学術としての“hospitality”は観光分野において進んで来たことは推測のつくところであるが、学会等の成立は1990年代に入ってからのことである。看護・福祉・観光・経営分野から“hospitality”は捉え

られているが、日本での受容研究はまだ十分とは言えない。博士論文も発表されているが、博士の学位として「ホスピタリティ（学）」は現在付与されていない。学問分野として確立したと判断していいか、今後も受容状況について調査を継続していきたい。

## 注

- (1) 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構「学位に付記する専攻分野の名称」  
(<https://www.niad.ac.jp/publication/gakui/meishou.html>)(2021年8月16日アクセス)  
令和元年度の調査結果（調査対象 792 大学、回答数 761 件、回答率 96.10%）
- (2) 国立国会図書館「1. 博士論文収集の概要と趣旨」  
(<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/hakuron/index.html>)(2021年8月16日アクセス)
- (3) 佐々木隆 『ホスピタリティ』とは何か—『広辞苑』と『大辞林』の場合— 『日欧比較文化研究』、第 25 号、日欧比較文化研究会、2021) では『広辞苑』と『大辞林』での“hospitality”「もてなし」「サービス」などの変遷を取り上げた。

## 印証資料

大日本大辞典刊行会編（1976）。『日本国語大辞典』、第 19 巻、小学館。

## 研究ノート

### サイデンステッカーの序文

堀 邦維（日本大学）

第 2 次世界大戦が終了するまで、日本の近現代文学の英訳が海外で出版された例としては、小林多喜二の『蟹工船』（1933 年）と火野葦平の『麦と兵隊』（1939 年）があるのみで、日本文学への海外の関心は決して高いとは言えなかった。<sup>1</sup> しかし 1950 年代に、アメリカの出版社クノップフが「現代日本文学英訳プログラム」を開始してから続々と日本の現代文学が翻訳出版され、英語圏の読者の目が急速に日本文学に向かい始める。

その「英訳プログラム」の 2 番目の企画が、谷崎潤一郎の『蓼食う虫』であった。その冒頭には、日本文学にまだ触れたことのない読者のために、「序文」が添えられていた。それを書いたのは、翻訳者のエドワード・サイデンステッカーである。この文章は、単なる紹介文というよりは、本格的な谷崎論と呼ぶべきものであった。それについて見てみよう。

10 頁にわたる「序文」冒頭で、サイデンステッカーは谷崎のエッセイ「東京を思う」の一部を引用している——

「しめた、これで東京がよくなるぞ」と云う歓喜が湧いて来るのを、如何ともし難かったのである」。(新漢字、現代仮名遣いに変更)かつての街の暗闇は消えて無くなり、新しい街には、車の警笛とヘッドライト、映画館、待ちゆく人々の明るいさんざめき、美容室とトルコ風呂のネオンサインなどが満ち溢れている。<sup>2</sup>

この谷崎のエッセイは、関東大震災から11年経った1934年に書かれたものである。上の引用にあるように、谷崎は震災による破壊によって東京の街が再建され西洋化することを夢想していた。多くの人的被害を伴った大災害であっただけに、いささか不謹慎とも思える内容であるが、確かに当時の谷崎の思いを正直に伝えている。それほど震災前の東京に嫌気がさしていたのである。

谷崎は震災の後に横浜から関西(神戸)に移住するが、その前と後とでは谷崎の文化観に大きな変化が見られる。移住前に見られた西洋礼賛が影をひそめ、日本の伝統文化へ回帰するのである。その結果は1929年出版の『蓼食う虫』にも現れているが、その最たるものは、『東京を思う』と同じ1934年に書かれたエッセイ『陰影礼賛』であろう。

サイデンステッカーは「序文」でそのことにも触れ、谷崎の初期の作品は、「ポー、ボードレー、ワイルドの影響」が一連の「悪魔的」と称される作品群に見られ、また個人生活でも西洋風を好んでいたと書いている。しかし、震災後に関西に移ってからは、日本の伝統文化に惹かれるようになり、それが『蓼食う虫』だけでなく、長編『細雪』、『源氏物語』の現代語訳などの代表作に反映していると書いている。

無論、この「序文」を読む欧米人はこれらの作品名を知る由もないので、これら2作品への言及は、意図的かどうかは別として、いずれもその後まもなく、サイデンステッカー自身が翻訳し、クノップフ社の日本文学シリーズに含まれることになるだけに、いわば前宣伝の役目を果たしていることになる。

作品内容については、『蓼食う虫』には東京と大阪、また二人の女性に象徴される新旧文化の対照が見られ、全体的には主人公要(かなめ)が、西洋の流行を追い求める東京の軽薄さよりも、古い伝統美がいまだに息づく大阪の町人文化の方へ傾倒していく様子が描かれていると説明している。<sup>3</sup>

興味深いのは、「序文」のなかで日本語から英語への翻訳について書いている部分である。少し長いが引用する――

日本語は絶望的なほど曖昧な言語で翻訳不可能であると言うのは簡単であるが、それは往々にして、最良の翻訳者をもってしても翻訳し得るかどうか怪しい、という誤った見解を導くことになる。二つの言語が全く同じ特性を持っているということはないのであるから、所詮翻訳文は仮のものでしかない。

日本語が明瞭さを拒否するというのは言い過ぎだが、確かにそのような性質がある

ために、翻訳を通じて日本文学を理解してもらおうとするのは難しい。谷崎は、文体に関する啓蒙的な評論『文章読本』のなかで、日本の作家はすべからく自分の言語の特性を知り、それに自分の表現を合わせるべきである。すなわち日本語は曖昧であるが、その曖昧さを自分のものとして活用しなければならないと述べている。<sup>4</sup>

実際には、『文章読本』の中に引用の最後の三行と一致する箇所はないが、ポイントを要約するとおおよそ上のようになる。日本語を英語に訳すことの困難の一つは、まさに日本語の持つこの「曖昧さ」であり、これを日本語に比べて明示的な性質を持つ英語に移し替えるのは至難の業であるとサイデンステッカーは言いたいのであろう。

ちなみに、谷崎自身は『文章読本』の中で、アーサー・ウェーリーの『源氏物語』の英訳について書いている。「ウェーレー [ウェーリー] 氏の源氏の英訳は、近頃の名訳であるという評判が高いのでありまして、日本人が読んでさえなかなか理解しにくい古典を流暢な英文に翻訳し、而も原作を貫く精神とリズムとをある程度に生かし得ている」([ ]内筆者)としたうえで、<sup>5</sup>ウェーリーの英訳と原文を比較し、原文で三行のものが、英文では七行になる現象について、谷崎は次のように書いている。

英文の方が原文よりも精密であって、意味の不鮮明なところがない。原文の方は、云わないでも分かっていることはなるべく言わないで済ませるようにし、英文の方は、わかりきっていることでも尚一層分からせるようにしています。<sup>6</sup>

サイデンステッカーは、谷崎の文章は彼自身が言っているように『源氏物語』の系譜に位置付けられ、「夢想的で浮遊するような散文」を目指していると説明するが、その一方で、「谷崎の文は詩的情趣に満ちているにもかかわらず、実際のところ明晰な表現の見本のようなものである」と書いている。むしろ『蓼食う虫』の場合、曖昧なために西洋の読者を当惑させるのは、小説の結末のあり方であると言う（『蓼食う虫』の主人公と二人の女性との関係は、その後どのようになるのか明示されておらず、読者の想像に任されている）。<sup>7</sup>

余談になるが、『文章読本』が書かれた1934年の時点で、谷崎がウェーリー訳の『源氏物語』を読んでいたという事実は留意されるべきである。ウェーリーの英訳が完成したのは1933年であるから、イギリスで出版されてから時を置かずして谷崎はそれを入力し、英語で読んでいたことになる。谷崎は、『細雪』が完成するとすぐに、ウェーリーに献本している。そしてそれがウェーリーからドナルド・キーンに回ってくることになるのだが、谷崎がウェーリーに本を送ったのは、彼が自作の英訳を手掛けてくれるのではないかと密かに期待していたからだと思われる。<sup>8</sup> 結局は、『細雪』はサイデンステッカーによって翻訳されることになった。

ともあれ、サイデンステッカーは「序文」を通じて、日本語と日本文学、さらには谷

崎の文章の特性について丁寧に説明し、欧米の読者たちを日本文学の世界に円滑に導き入れようと努めていることが分かる。しかもここで述べられている内容は、単なる日本文学入門ではなく、日本の文学界においても谷崎論として立派に通用する水準であることは注目すべきであろう。

## 注

- 1 それより前に、古典文学ではあるが、アーサー・ウェーリーが『源氏物語』を1920年代に英語に翻訳しており、ヴァージニア・ウルフをはじめとするモダニズムの文学者の間に一時的に「源氏」ブームが起こったが、一過性のものであった。
- 2 谷崎潤一郎、『谷崎潤一郎全集』第21巻（中央公論社、1986年）12-13頁。原文を筆者が、新漢字、現代仮名遣いに変更した。『全集』からの引用に関しては同様。
- 3 Edward G. Seidensticker, "Introduction" in Junichiro Tanizaki, *Some Prefer Nettles*, tr. from Japanese by Edward G. Seidensticker (New York: Knopf, 1955) xi-xiii.
- 4 Seidensticker, "Introduction," xiv.
- 5 谷崎潤一郎、『谷崎潤一郎全集』第21巻（中央公論社、1986年）125頁。
- 6 谷崎潤一郎、『谷崎潤一郎全集』第21巻（中央公論社、1986年）126頁。
- 7 Seidensticker, "Introduction," xi-xiv.
- 8 キーンはこの経緯について次のように書いている——  
1951年の春、英国人で日本文化の大家であるアーサー・ウェーリー先生から『細雪』のことを聞き、是非読ませていただきたいと申し出たら、ウェーリー先生は快く三冊本をくださった。後で三百部限定版だったことがわかったが、谷崎先生は一冊ずつ筆で献辞を書いておられた。一冊目に「慧以礼伊」様 著者」となっている。ドナルド・キーン『二つの母国に生きて』（朝日新聞出版、2015年）196頁。

## 研究ノート

### A Brief Note on Unindividualistic Ophelia, No. 3.

Noboru Fukushima

What strikes us most is the symbolic meaning of the flower distribution in this "Scene of Madness." It is superficially nothing more than a list of flowery words, but by it we are shown that the mad Ophelia accurately sees through people, especially the entity of King Claudius, Queen Gertrude. It was beyond the imagination of Ophelia and was nothing but the truth in madness. Unless Ophelia's sorrow in the scene of madness and death had approached us with

overwhelming force, this play would have become a bloodshed tragedy. What strikes us strongly is not that Ophelia abandoned Hamlet, but that Hamlet abandoned Ophelia. Ophelia's love for Hamlet never changed. It is Ophelia who, according to the advice of her brother and father, refuses to return the letter to him, but this has nothing to do with Ophelia's love of Hamlet. Otherwise, the sadness of "the Scene of Madness" would not have been so impressive. The sadness of Ophelia's frenzy and death is the cruelty of her situation, which could be called the cruelty of fate, but it is a patheticalness that is only possible on the premise of the cruel fate of her beloved Hamlet, who abandoned her and killed her father. Therefore, we must now consider what is meant by the so-called "Nunnery Scene" of Act 3, Part 1.

### 3. Nunnery Scene

The "Nunnery Scene" is where Hamlet returns the love letter to Ophelia and insulates himself from her. This is not so much because of his anger at Ophelia's betrayal (as an enemy agent) as it is because of his distrust of women in general, based on the collapse of the mother figure, and his grief over their weakness, and his feeling that the only way to avoid the inevitable degradation of women, as long as they live and marry, is to go to a nunnery. This must be the true meaning of the line "Get thee to a nunnery," (*Ham.* 3.1.133). It has been a common interpretation since Dover Wilson's argument that he is blindly angry at Ophelia's betrayal and tells Ophelia to "Get thee to a nunnery" out of spite against her mother (193), but this is too pathetic for Ophelia and too selfish for Hamlet. That would turn his love for Ophelia into hatred, and seriously undermine Hamlet's character. The task Hamlet faces in this play is not as simple as avenging his father's murder, which would solve the problem. The problem is to restore justice to this Danish country and remove corruption and evil from this world. "That ever I was born to set it right!" (*Ham.* 1.5.187). In order for him to carry out such a task, separation from Ophelia is inevitable. However, in order for him to avoid becoming collateral damage on the path he is about to take (a path of vengeance that could turn out to be the work of the devil if he makes a mistake), he has to break up with this version of a weak woman. This must be Hamlet's true intention in abandoning Ophelia, and it seems to be the painful part of this scene.

When Hamlet asks Polonius, "Have you a daughter?" (*Ham.* 2.2.179), and Ophelia, "Where's your father?" (*Ham.* 3.1.129), he must have seen something resembling his relationship with his mother Gertrude in Polonius and Ophelia's father-daughter relationship. Just as his mother's feelings of adultery and immorality curse his "this too sullied flesh" that was descended from him, he cannot help but think of the shadow that Polonius' vulgarity and crooked disposition cast on this pure and lovely girl. If one part of the responsibility that led Hamlet to abandon Ophelia lies in the corruption of his mother Gertrude, the other part is in the crooked behavior of Ophelia's father. Ophelia is therefore prevented from achieving love by two of her lovers: Gertrude, who

laments "I have been my Hamlet's wife:" (*Ham.* 5.1.233), and her father, who admonishes "Do not believe his bows," (*Ham.* 1.3.126).

Strangely enough, the relationship between mother and son and between father and daughter shows similar distortion. It shows the dangerous nature of the parent-child relationship, where Gertrude is the one who makes Hamlet and Polonius the one who makes Ophelia unhappy. Hamlet's question shows that he is very conscious of it. The same kind of consideration for Ophelia as a victim may be in Hamlet, which leads to "Get thee to a nunnery." (to be continued)

\* This paper is based on Noboru Fukushima. "Innocence in Ophelia [Ophelia No Inosensu]." *Journal of English Language and Literature*. Vol. 32 (The English Literature Society of Nihon University, 1984), 17-28.

#### Works Cited

Shakespeare, William. *Hamlet*. The New Cambridge Shakespeare. Ed. Philip Edwards. 1985. Cambridge UP, 1988.

Wilson, J. Dover. *What Happens in Hamlet*. 1935. Cambridge UP, 1979.

Former Professor  
Nihon University



#### 会長の言葉

コロナのなかで二度目の秋を迎え、50周年に向けて想うこと

日本英語文化学会会長 中井延美

コロナと共に過ごす二度目の秋が巡ってきた。実質的にコロナ元年であった去年（2020年）は、例会の対面開催を見送ったり、第23回全国大会の対面開催をホームページで予稿集を公開することに置き換えたり、当初は翻弄されっぱなしであった。しかし、だんだんと役員会も例会もZoomで開催するようになり、懇親会ではテーマごとにブレイクアウトルームに分かれて闊達に議論を続けることもあり、今はオンラインでの学会運営が定着した感すらある。

以下の画像は、本会で初めてオンライン開催した第145回例会（2020年12月）のときの様子である（画像1は役員会、画像2は研究発表会）。

【画像1】



【画像2】



そして、今年（2021年）、第24回全国大会については、もともと9月3日に明海大学での対面開催を視野に入れて準備を進めていたが、昨年が続いてそれが叶わず、同日全面的にオンラインで開催することになった。

5つの研究発表があり、本会ならではの多様なテーマについて興味深い議論が展開された。[1] 英語の代用表現 *one* の照応関係と解釈について検討した拙論を皮切りに、[2] ラティガン劇で描かれる女性たちについて、『深く青い海』に登場する「ヘスターの場合」に焦点を当てて論じた落合氏、[3] 6月例会での高橋氏による日米の野球文化の違いに関する研究発表と関連づけながら、グローバリゼーションとローカライゼーションという視点から異文化受容における普遍的パターンを論じた柳浦氏、[4] 勝負は実力か運か、能力主義（meritocracy）の観点からヘミングウェイの“The Old Man and the Sea”を新たに読み解くことを試みた錦織氏、[5] トニ・モリスン『タール・ベイビー』にお

けるシェイクスピアの『テンペスト』表象の変遷について、ミランダとジェイディーンの関係を中心に考察した福島氏の各発表が行われた。

また、同大会の総会では、本会役員会でかねてより検討されてきた電子ジャーナルプラットフォーム「J-Stage」での論文公開について、参加会員の承認を得ることができた。これまで、本会の学会誌『異文化の諸相』に掲載された論文は、アーカイブとしてホームページ上で公開されてきたが、それに加えて、本年度発行予定の同誌 42 号より、掲載論文が J-Stage において公開されることになる。これは、本会にとって大きな節目となるだろう。

節目といえば、もう一つ、今年 3 月に、『創立 45 周年記念論文集 英語文化研究』が上梓された。同論文集のあとがきでも述べたことだが、イギリス文学、アメリカ文学、比較文学、英語教育、言語学といった異なる分野の研究のなかで、“英語文化”という要素が、それぞれ、どのようにかかわり、扱われているのか——そのような視点で本論文集が読まれることにより、分野間の垣根を超えた知的探求につながっていくことを願っている。

そして、来年（2022 年）には、本会は、その前身である「上毛英米文学会」「ビビュロス同人会」「ビビュロス研究会」を含めると、50 年目という、さらに大きな節目を迎えることになる。その記念すべき年に何をするのか、何をすべきなのか、現時点で会長として何か特別な構想があるわけではない。ただ、英米文学の研究会に端を発する本会において、半世紀にわたって先達から綿々と受け継がれてきた“英語文化”を軸とした学術研究の議論と発信の場としての本会の存在意義とその重みを再認識することができるような「なにか」を企画できればと考えている。

2 年前（2019 年）の 12 月例会を対面で開催して以来、ずっと対面での学会活動を行うことができていない状態が続いている。目下（2021 年 10 月中旬）の懸念は、昭和女子大学での対面開催を予定している今年の 12 月例会が、果たして本当に対面で実現するのだろうかという問題である。

学会活動も含め、パンデミック前の日常に戻ることは現実的に想像し難いが、学問



の探究という点で本質的な部分が変わることはないように思う。来たる 50 周年に向け、我々の研究活動がより成熟したものになるよう、皆さんと力を合わせて歩んでいきたい。



### 大会研究発表一覧

オンライン開催 (Zoom) 日時 2021 年 9 月 3 日 (金) 13:00~16:10

★13:00 開会式

総合司会 岸山睦 (昭和女子大学)

★第 1 発表 13:10~13:40

タイトル：英語の代用表現 *one* の照応関係と解釈について

発表者：中井延美 (明海大学)

司会：小野雅子 (明海大学)

★第 2 発表 13:40~14:10

タイトル：ラティガンが描く女性たち—ヘスターの場合

発表者：落合真裕 (十文字学園女子大学)

司会：水野晶子 (拓殖大学)

★第 3 発表 14:10~14:40

タイトル：グローバリゼーションとローカライゼーション

発表者：柳浦恭 (千葉経済大学短期大学部)

司会：須永隆広 (駿河台大学)

★第 4 発表 14:40~15:10

タイトル：Ernest Hemingway “*The Old Man and the Sea*” 勝負は実力か運か

発表者：錦織裕之 (元立正大学)

司会：本間章郎 (駒澤大学)

★第 5 発表 15:10~15:40

タイトル：トニ・モリスン『タール・ベイビー』におけるシェイクスピア

『テンペスト』表象の変遷—ミランダとジェイディーンの関係を中心に—

発表者：福島昇 (元日本大学)



第 24 回全国大会総会（2021 年 9 月 3 日オンライン開催）において同誌 42 号より、J-Stage への掲載が前提となることが承認されました。本件についてのご質問等ある場合は、『異文化の諸相』編集委員長（[nicchu@hosei.ac.jp](mailto:nicchu@hosei.ac.jp)）までメールにてご連絡ください。



<<http://nihoneigobunka.jellybean.jp/>>

\* *NEWSLETTER* は学会ホームページに掲載されます。デジタルファイル /PDF 等は、アップデートができます。見落としや訂正がございましたらご連絡ください。編集部付記>

### 編集後記

*NEWSLETTER* 編集長 清水 純子

2021 年 9 月 3 日（金）日本英語文化学会大会は無事終了することができました。新型コロナウイルス感染拡大が止まらないために Zoom での開催になりましたが、充実した内容の発表に加えて 30 名弱の参加者を得て成功だったといえましょう。

我らの大会終了に続いて、心配されていた 2020（開催は 2021）東京オリンピックとパラリンピックも無事終了しました。日本はたくさんのメダルを獲得しました。その一方で、デルタ型変異種が予想外に市中を荒らしまわり、感染は拡大し、病床は逼迫しま

した。自宅療養中に亡くなる人も増加し、母体が感染して入院できなかつたために命を落とす新生児も出て、批判をよびました。

コロナ感染拡大に伴い、政局も混迷を極めました。安倍氏に続いて菅総理も退任して、10月4日には岸田文雄新総理が誕生しました。しかし総理の魔法の杖でコロナウィルスを撃退することはできません。法の改正も必要ですが、特定の人や団体のせいにすることなく、まずは国民一人一人が細心の注意をもって行動し、限界まで耐えるしかないのでしょうか。

真子様は、10月26日結婚により皇籍を離れ、小室真子さんとなりました。NYでの新婚生活が始まる予定ですが、夫君圭氏の司法試験不合格でどうなるのでしょうかね？

いろいろ心配なことや、手放して祝福していいのかわからないことが続きますが、コロナの禍に一日も早く終止符を打てるよう、皆が心を一つにして努力せざるを得ない状況です。来年のこの欄にはもっと明るい話題を書けることを祈っています。

編集：日本英語文化学会 / 編集部：清水純子 松山博樹 / 発行人：中井延美

発行所：〒279-8550 千葉県浦安市明海1 明海大学 管理研究棟 1718

中井延美研究室 日本英語文化学会 e-mail: [nnakai@meikai.ac.jp](mailto:nnakai@meikai.ac.jp)

2021年11月10日発行

# 日本英語文化学会

© 2021 The Japan Society for Culture in English